

報徳訓



父母の根元は天地の令命に在り
 身体の根元は父母の生育に在り
 子孫の相続は夫婦の丹精に在り
 父母の富貴は祖先の勤功に在り
 吾身の富貴は父母の積善に在り
 子孫の富貴は自己の勤勞に在り
 身命の長養は衣食住の三に在り
 衣食住の三は田畑山林に在り
 田畑山林は人民の勤耕に在り
 今年の衣食は今年の産業に在り
 来年の衣食は今年の艱難に在り
 年々歳々報徳を忘るべからず

報徳訓解説

当神社の御祭神である二宮尊徳翁は自らの力で学び、そして気づきを得ながら報徳思想と呼ばれる偉大なる精神を残されました。
 この尊徳翁の精神は永遠に変わることのない真理を貫き、何時の時代においても、人づくり、国づくりの土台となる精神であります。
 報徳訓はその精神（報徳の道）をわかりやすく表現しているものです。

お問合わせ 報徳二宮神社 社務所
 小田原市城内8-10 電話 0465-22-2250 <https://www.ninomiya.or.jp>

今も大切にしたい報徳の教え

江戸時代末期に現代に通ずるさまざまな問題に真っ向から取り組み、人々のやる気を興ししながら地域の課題を解決し、財政改革と農村復興を成し遂げた二宮尊徳翁の報徳思想と報徳仕法は私達が生きる現代の諸課題をも解決することができる大切な教えです。

二宮尊徳翁が残してくれた教えの一部をご紹介します

● 積小為大 せきしょう いたい

大きな事をしたいと思えば、小さな事を怠らず勤めるがよい。それは小が積つて大となるからだ。

およそ小人の常として、大きな事を望んで小さな事を怠り、できにくい事に気をもんでできやうい事を勤めない。それゆえ、ついに大きな事を成し遂げられない。それは、大は小の積んで大となることを知らないからだ。

たとえば百万石の米といつても粒が大きいわけではない。一万町歩の田を耕すのも、一畝ずつの手わざである。千里の道も一歩ずつ歩いて行き着くのだし、山を作るにも一もつこの土を重ねてゆくのだ。

この道理をはつきりわきまえて、精を出して小さな事を勤めてゆけば大きな事は必ずできあがる。

● 分度 ぶんど

嘉永五年、二宮尊徳翁は湯ぶねのふちに腰かけて、こう言われた。

「世の中では、そなたたちのような富者が、みんな足ることを知らずに、飽くまで利をむさぼり、不足を唱えている。それはちょうど、大人がこの湯ぶねの中に突っ立って、かがみもせずに、湯を肩にかけながら、湯ぶねが浅すぎるぞ、膝までもこないぞと、怒鳴るようなものだ。自分がかがみさえすれば、湯はたちまち肩まで来て、自然と十分になるだろう。ほかに求めるものがどこにあるのか。世間の富者が不足を唱えるのは、これと何ら変わりはない。およそ、分限を守らなければ、千万石あってもなお不足だ。ひとたび分に過ぎた過ちを悟つて分度を守れば、余財がおのずからでき、十二分に人を救えるはずだ。百石の者は五十石にかがんで五十石の余財を譲る。もし町村で、ひとりこの道をふむ者があれば、人々はみんな分を越えた過ちを悟るだろう。」

人々がみんなこの過ちを悟つて、分度を守つて、よく譲れば、その町村は富み栄えて平和になると間違いない。」

● 遠きをはかる とほ

「遠い先のことを考えるものは富み、近まのことはかり考える者は貧乏する」

遠い先のことを考える者は、百年のちのために松・杉の苗でも植える。まして春植えて秋実るものなど当たらぬ前のことだ。だから富有でいられる。ところが、目先のことはかり考える者は春植えて秋実るものでさえ、まわりくどいといつて、ただ眼前の利益に迷つて、まかずに取り、植えずに刈るようなことばかり目をつける。だから貧窮するのだ。まかずに取り、植えずに刈るようなものは、眼前に利益があるように見えるが、一度取つたら二度と刈れない。ところが、まいて取り、植えて刈るものは、年々歳々尽きることがない。だから無尽蔵というのだ。

報徳博物館

幕末の疲弊した社会の再建人・二宮尊徳翁の「報徳」と呼ばれる人づくり、国づくりの思想とその業績をお伝えする博物館です。多数の尊徳翁関係文献、資料、遺品、文化財等を陳列、公開し、研究と普及に努めています。



住所：〒250-0013 小田原市南町 1-5-72
 TEL: 0465-23-1151
 開館時間：9:30~16:30 (最終入館 16:00)
 入館料：大人(中学生以上) 300円
 小学生以下無料
 休館日：毎週水曜日・木曜日・金曜日
 年末年始等不定期あり
 ※詳細はホームページで
<https://www.hotoku.or.jp>
 団体見学の場合は休館日も承ります。ご相談下さい。

報徳二宮神社



由緒



社 殿

明治二十七年（八九四）四月、福住正兄が中心となり、二宮尊徳翁の教えを慕う6カ国（伊豆、三河、遠江、駿河、甲斐、相模）の報徳社の総意により、尊徳翁を御祭神として、生誕地である小田原の小田原城二の丸小峰曲輪の一角に、神社が創建されました。

明治四十二年（一九〇九）本殿・幣殿を新築、拝殿を改築し、神苑を拡張し現在の社地の景観へ整えました。

平成六年（一九九四）には創建百年記念奉告祭を斎行して今日に至っています。

社殿は神明造り。

なお、拝殿礎石は天保の大飢饉の際、藩主大久保公の命により尊徳翁が小田原城内の米蔵を開き、米が人々の手にわたったことにより、小田原十三万石の領内から一人も餓死者も出さずにすんだという、その米蔵の礎石が用いられています。

祭典

一月一日 歳旦祭
一月二日 筆まつり
二月十一日 建国祭
四月十五日 例祭
六月三十日 夏越の大祓
九月第三日曜日 神徳景仰祭
十二月三十一日 師走の大祓
除夜祭
毎月一・十五日に月次祭

二宮金次郎像



薪を背負って歩きながら本を読む金次郎の姿が初めて登場したのは明治二十四年（一八九二）に出版された幸田露伴の『二宮尊徳翁』という本の挿絵でした。

当神社にある少年像は昭和三年、昭和天皇即位御大

礼記念として神戸の中村直吉氏より寄進されたブロンズ像。製作者は三代目慶寺丹長。これと同じ像は、全国の小学校に向けて約一千体制作されましたが、戦時中全て供出に遇い、現在残っているのはこの一体だけです。

尚、この像は当時のメートル法普及の意図を反映してちょうどメートルの高さに制作されています。

報徳二宮神社御祭神

二宮尊徳翁 「一七八七〜一八五六」

江戸時代後期の農政家・思想家。通称金次郎。尊徳は武士としての名乗り。幼少時の逸話が一般に知られているが、後に報徳仕法と呼ばれる独自の方法と理念で、小田原藩や日光神領などを含む、諸家諸領の復興に尽くした。



一、苦難の少年時代

金次郎は相模国栢山村（現小田原市）の比較的裕福な農家の長男として生まれた。しかし五歳の時、酒匂川の洪水で田畑が壊滅して一家は没落。金次郎は早朝から日が暮れるまで野良仕事に精出し、夜は遅くまで縄ないに励み、時には、小さな身体で父の代わりに酒匂川の堤防工事にも出た。また、山に薪採りにも行き、それを町に売りにも行つて貧しい家計を助けた。少年金次郎像はこの頃をイメージしている。及ぶ限り応じて窮乏を救った。特に天保の大飢饉の際には、小田原藩や茂木・烏山藩をはじめ各地の飢えを救った。

四、幕臣二宮尊徳

天保十三年、五十六歳で幕府に登用され、利根川分水路測量調査や「仕法雛形」の作成に続いて、日光御神領の復興仕法等に没頭したが、その受命の嘉永六年（一八五三）の頃から病気がちとなり、体調不十分の中を現地の回村調査指導を強行し病再発、事業半ばで安政三年（一八五六）で没した。享年七〇歳。こうして尊徳翁の後半生

たものである。十四歳で父を、十六歳で母を失い、兄弟離れ離れとなり親類に預けられた。こんな中でも、わずかな時間をも無駄にせず、読書に励み、菜種や捨苗の栽培から「積小為大」の理を悟り、以後これを実践し、二十四歳の時には、一町四反余の農地を持ち、見事に一家の復興を果たした。

二、「その身は勿論、村為にもなり」

二十五歳の時、小田原藩家老服部家の若党になり、同家の奉公人達に呼びかけて「五

は、時には生命の危険にも遭いながら、人々の困窮を救い、村々の荒廃を興し」東西南北の人民の安堵」のために捧げたのであり、直接・間接に指導した農村は六〇〇余にものぼる。

また、内村鑑三著『代表的日本人』の中でも、十九世紀末、欧米諸国に対して「日本人の中にも、これほど素晴らしい人物がいる」と苦難の時代を救った偉人として尊徳翁は紹介されるなど、明治時代以降の政財界人にも多くの影響を与えたのである。

尊徳翁の教訓や訓言は、今の時代にも通じる、私達が手本とすべきものばかりである。

三、難村復興に 取り組む

藩主大久保忠真の命を受けて、極度に疲弊荒廃した分家の旗本宇津家の桜町領（栃木県真岡市）を物心両面にわたって立ち直らせた。それ以後も周辺の旗本領などの求めに力